

私が感じるもの—そして私

モンゴル オドゲレル アミリラシ

新しいクラスだ。「入学おめでとう。今日から君達は普通の高校生ではなく、学生だということ」を常に意識し、考え、そして行動するのだ。」という言葉で始まった校長先生の入学式のあいさつはまだ幼い14、15才の私達の頭にどんなメッセージを残したのだろうか。高校進学、新しく建てられた学校、新しい環境、新しいクラス、何もかも新しく始まるそんな時に自分が学生と呼ばれるのは気持ち良かった。私が入ったこの学校はふつうの高校ではなく、当時国で初めて実践される高等専門学校であった。多分この時からだ。私が人と人、人と仲間との関わり、関係、コミュニケーションについて考え始めるようになったのは。「どこへ行ってもコミュニケーション力は大切だ。この学校でその能力を身に付けろんだ。」という校長先生の言葉がヒントになったのかもしれない。

月日が経ち、クラスのみんなとも馴染んできた頃だ。今日はクラスの一人の友達の誕生日だということを知った。しかし、何だこのクラスの雰囲気は。一人だけではない。二人、三人とクラスの友達の誕生日が過ぎてゆくと、いうのに、単に「お誕生日おめでとう。」と数人が言うだけで他は知らんぷり。一日中一緒に同じクラスで勉強している仲間の誕生日だ、というのになぜみんなは祝ってあげないのか。そこで私は動き出した。一人一人から百トゥグルグ(四円)集め、三千トゥグルグ(百円)ぐらい集まったお金でお菓子を買い、誕生日の人が教室に入ってくる時にサプライズで迎えるのだ。担任の先生にも同様に。私は卒業するまでやり続けた。たまにいやになる時もあった。本当は誰にも関係ないのだ。自分の世話もちゃんとやれていないというのに。バカみたい。

その頃、私はつくづくとわかるようになっていた。いろいろな場面でいろいろなふりをする

顔、無視する態度、思いやりのない心、本音を言わない姿など。世の中こりゃってうまくやっっていくものなのだろうか。これが人との関わり方というものなのか。しかし、いつの間にか自分もそれに同化していつているではないか。

そんなある時、私はある先生の発した言葉にそれまでの肩の重みがふっと軽くなった。「君達はなぜ落ち込んだり怒ったりするんだい。そのままの思いを言葉にして言いたいことを伝えればいい。そうすればどんなに楽なことか。」その言葉は私の心の中へすくっとしみ込んできた。その日から私に変化が表れた。人と弾んで話すようになり、閉じていた扉が開いたかのようにそこからありのままの感情や声があふれ出るようになったのだ。

新しいクラスだ。新しい学校。新しい仲間。新しい出会いが待っている。私の次のコミュニケーションの現場は日本だった。話し合う広場は日本だけではない。国際広場だ。ここ

は日本語学校。私は留学生。日本語を学ぼう
とする世界各国の若者達が集まる場所。国際
環境なんだからきっとみんなオープンだろう
と思いきやそうではなかった。クラス分けで
私はここEクラス、十代が七人、四十代が一
人、他は二十代の十四人のクラスだ。学校が
始まったばかりでみなおとなしい。はしゃぐ
のはハイティーンの私達だけ。そんな時空
を讀んでふと思ってしまう。私達のこの姿は
大人にとってバカバカしいのだろうか。彼ら
みたいに大人らしくしていればいいのか。彼ら
か。十代全員が自分らしくいたわけでもない。
中にはじっと静かにしている人もいる。これ
から一年も一緒にいるみんなとこんな感じで
毎日いるのは良いことだろうか。私は三度目
の誕生日計画を実行することに決めた。二回
目は中学生のEクラスに英語を教えていた時
で最も自分らしくいられた場所だ。彼らの笑
顔は最高だった。今度はどうだろうか。
私は仲間のように見えて実はそうではない

よくな他人行儀な雰囲気がいやだった。前も
そうで今もそう。私は同じく小さなお金を集
め、その人の好物を買い、手作りバースデー
帽子でサプライズ。最初はみんなは不思議そ
うな様子で、誕生日の歌にも声を合わせてく
れなかった。しかし、それからだんだんと教
室の雰囲気が変わり始めた。彼らは少しずつ
自分を出してくるようになっていった。大人とか二
十四才とかいう名札を付けている彼らの中の
人が見えてきたのだ。実はまだふざけたい男
の子のキャラだったり、カワイイ変顔を見せ
てくれたり、、、クラスメイト達とのようには
関われない担任の先生の大きく笑っている嬉
しそうな表情、めったに見られないピースサイ
ンまでも見られた。今はみんなすっかり仲良
しで、まるで家族のようだ。そして私にはま
るでみんなが高校生に戻ったような感じがする。
私は思う。人間関係はすてきた。それには
素直な心が大事。この社会でみんな素直でい
られたらなあ。

今私にできることは何か。もし自分が動いていなかったらと思うと心が暗い。だから私の小さな行動で少しでも状況を変えられたら、周囲に変化をもたらすことができたら、そのための時間はもう無駄だとは思わない。

人は子供の頃のように純粹なままではいられない。私も変わってゆく。しかし、私は仮面をつけた顔の中にはいたくない。

人の心とは一体どういうもので、どう違うのか。生まれた時はきっと同じだったろう。忙しい日々の中、私はこんなことを考えている。